



司馬遷史記Ⅲ① (天下統一と独裁の虚実)

11月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年11月21日(火)

時の勢い・数奇な運命・非常な冷徹さ、始皇帝が天下を統一し、二千年にわたる中国王朝の出発点を築いたのはその類まれな個性であった。秦帝国は始皇帝自身の写し絵であり、彼の死とともに一挙に崩壊する。

秦の天下統一は、始皇帝一代で成し遂げられたわけではない。戦国初期、殉死を禁止した**献公**、商鞅と改革を実施した**孝公**、張儀、白起を用いた**昭王**などにより築かれた他の六国に対する**秦の圧倒的な優位性**が基礎となっている。

天下を狙う強国となったのは、①**広大な背後地**を存していること、②**民俗が素朴**で他の中原諸国奢侈な生活に親しんでいなかったこと、③**伝統的貴族勢力が強かったこと**また、昭王の頃に**李冰**が大規模な水利工事により四川盆地を沃野千里に変え、関中では**鄭国渠**の完成で生産力は一層高まっていった。

宇宙の最高神**秦皇**と伝説上の聖王、**五帝**とを組合せ「**皇帝**」という称号を作った。始皇帝は、商鞅の改革以来の**度量衡の統一**、**貨幣の統一**、**車幅の統一**、**文字の統一**、**思想の統一**(焚書坑儒)などを行い、また全国の富豪12万戸を都の咸陽に移住させ、彼等が財力によって地方に勢力を張ることを防いだ。**五回にわたる巡幸**も、唯一の権力である皇帝の力を天下にあまねく行きわたされた。**全国を皇帝の直轄地**として**郡県制**を施行し、皇帝の派遣する官僚が直接全ての人民を支配する**中央集権**とした。

このような**帝国統一のための大事業**が、**わずか10年余のうちに始皇帝**というカリスマによって強引に推し進められた。

始皇帝がその権威を誇示するために興した**大規模な造営工事**は、人民の租税、労役をギリギリまで搾り上げ、始皇帝の末年に、民衆の憤懣はすでに爆発点に達していた。

始皇帝の死の後、**陳勝・呉広**という名もない貧農が挙げた小さな火花がたちまち原野を焼き尽くしたのはそのためである。

(参考：司馬遷 史記 徳間書店)